第1回　徳島市文化振興ビジョン策定のための市民会議　会議録

日　　時　平成２７年１０月１６日（金）　午後２時～午後４時１５分
場　　所　徳島市役所８階庁議室
出 席 者　２０名（委員９名、事務局ほか）

１　開会

２　副市長挨拶
　　副市長挨拶

３　委員紹介
　　委員紹介
　　事務局紹介

４　市民会議設置要綱説明
　　事務局より設置要綱の説明

５　会長・副会長の選出
　　会長に玉有委員、副会長に森委員を選出

６　議事　（１）徳島市文化振興ビジョン策定について
　　事務局から資料１、資料２、資料３について説明

Ａ 委 員：　文化について、情報収集、蓄積した情報をいかに活用するかが大切と感じた。情報を発信し続けることが大切と思う。市にある文化の中でも、守られている部分といつの間にか忘れられている部分があると感じる。情報や資料を発信するとともに、利活用していくことも求められる。
　また、「もの」として存在しない民俗学的な事柄や祭り、お噺なども守り育てて記録していくことも大切ではないかと思う。

会　　長：　国の方向性や法律の状況を押さえ、市の文化を考えていく上で、現状をどのように認識し、どういう方向性を立てるかにより、今後に大きく影響する。市の文化芸術に関する現状において、良い点や課題も含めご意見をいただきたい。

Ｂ 委 員：　私は県外出身だが、地元の方の徳島に対する評価が低いのが残念である。特

に若い人の地域に対する認識を広めていくことが大切と思う。

また、議論の方向性が少々ハードに寄っている部分がある。ハードの重要性を高めるには市民の需要が大事であり、その需要を作り出すためには、文化に対する認識を高めていくことが重要である。

この文化振興ビジョンで扱う「文化」とは、どの範囲を含めるのか。

事 務 局： 第２回市民会議にて、まず芸術文化や生活文化など、文化振興ビジョンの対象となる「文化」の範囲について議論していただきたいと考えている。

会　　長： 文化芸術振興基本法（以下、基本法という。）では、芸術文化、メディア芸術、伝統芸能、生活文化、国民の娯楽である講談や落語が文化の対象として含まれている。徳島市の文化振興も全方向を対象にしていくのか、または、もう少し対象範囲を絞っていくのか、次回に向けて考えていただきたい。

Ｃ 委 員： 「文化」の範囲と同じく、「文化振興」の範囲も広い。市では地方創生に絡んだ総合戦略計画を策定中と思うが、文化振興ビジョンはその総合戦略計画とどのようにリンクするのか。別の計画と考えているのか。

また、文化振興ビジョンでは、新ホールをどのように活かすのか。資料１に、「新ホールに対する市民の期待とニーズに応えるため、また、文化の持つ力を徳島市のまちづくりに活用するため文化振興ビジョンを策定する。」と書かれているが、新ホールを最大限活かすための文化振興ビジョンなのか。それとも、新ホールに限らずもっと広い範囲を対象とするのか。文化振興ビジョンと総合戦略計画をどう関連させるのか。市の考えを伺いたい。

事 務 局： 資料２の参考２で、第４次基本方針のポイントとして、「第１、社会を挙げての文化芸術振興」とある。地方創生を戦略的に行う方策のひとつとして、文化芸術があると考えている。

文化振興ビジョンでは、新ホールをひとつの核としてどのように文化振興を図っていくか、また、新ホールを建物としてどう発展させるかについて位置づけていく。これまでに新ホールの管理運営などの議論もしているが、今回はもっと大きな視点で新ホールを位置づけることを考えている。

Ｃ 委 員： 地方創生とも新ホールとも関わるという認識で理解した。

地方創生と関連するならば、徳島市らしさを大きく出さないとならない。総合的にあれもこれもと手を出すのではなく、すでにある程度活動人数がいて、全国的に知名度がある阿波おどりや人形浄瑠璃を中心に据えて考えていくことが必要になると思う。

Ｂ 委 員： 地方創生の総合戦略ならば戦略が必要なので、特徴的な文化に注力するのはわかるが、文化振興ビジョンは文化の底上げが大事である。そのためには排他性を持たないことが重要と思う。文化振興ビジョンは文化の底上げを目的とし、総合戦略の中で位置づけるものに関しては戦略的に取捨選択をする方が良いと思

う。

会　　長：　文化全体のレベルを上げるということと、徳島市らしさの重点をどこに置くか、という両方の観点と思う。

Ｃ 委 員：　現在注目されていない分野を育てていくことも考えられる。スポーツで例を挙げると、ラフティングは一般的にはあまり知られていない競技だからこそ、世界レベルの選手が育った。

会　　長：　現代はＩＴ技術が発達しているので、すぐに世界と繋がることができ、予想外に全国や世界から注目されることがある。今、徳島市で行われているアニメやＬＥＤのような文化を掘り起こしたり、光を当てていけたりしたら良いと思う。

Ｄ 委 員：　全国から「マチ★アソビ」に参加するために徳島市へ来ている。市に住む人と、遊びに来る人をどのように繋げて文化に発展させていくかということを考えていた。

会　　長：　資料４の基本法第９条では、メディア芸術の定義として、アニメや漫画が文化に含まれている。特にこの分野はクールジャパンとして日本がアピールし、文化庁が奨励している。メディア芸術については全国的な認知度が上がっているのではないか。

Ｂ 委 員：「マチ★アソビ」には全国から多くの人が参加しているが、地元の商店街がどの程度潤い、どの程度地域振興に結びついているかというと、あまり効果的ではない。徳島の土着的な文化と新しい文化を繋げるために市民の理解を深めることも、文化振興ビジョンの大事な視点ではないか。

Ｅ 委 員：　地方移住を検討する際には、伝統や地域文化、土地の漠然とした文化も重要な要素である。

会　　長：　文化を個人の趣味として楽しむだけの時代ではなくなってきている。そのことが、基本法に書かれている「活力ある社会の実現に寄与する」文化の効用として出てきていると思う。しかし、地域活性化に繋がるものは何でも文化だということになると、文化振興ビジョンの範囲が広がって収拾がつかない。

Ｆ 委 員：　市にはどのような文化が特徴としてあるのか。県の中心として徳島市ではどのようなことができるのかを絞っていかねばならない。まずは、市として何が活かせるかを検討した方が良い。

会　　長：　市域の中にある文化資源から絞るという意味合いか。

Ｆ 委 員：　地域にあるものを活かすことを考えると、徳島市内では何ができ、どういう人が移住してくれるかを考えたほうが早い。

会　　長：　今あるものを押さえた上で検討するというご指摘だと思う。幅広い文化をどのように絞っていくのかは難題だが、地域の文化資源は範囲を絞り込むためのひとつの物差しになるということである。

Ｆ 委 員：　徳島市は、地元に資源となりそうなものがあっても、注目するのが遅いと思

う。

会　　長：　今あるものだけで考えていくのも、限界がある。今は無い新しいものを作っていくのも、文化の大きなテーマになると思う。ただし、闇雲に取り組むのではなく、その両方の可能性を探ることが重要ではないか。

Ｆ 委 員：　例えば、農村舞台は徳島県内に多いが、「農村」なので市だけで行うのは無理である。行っている地域と提携していかなければ成り立たない。提携について呼びかけることを考えていかねばならない。

会　　長：　徳島市の文化活動は県都として県民全体に及んでいるという特徴があり、他都市と違うところである。徳島市の文化振興ビジョンとは言え、文化の中心地としての役割や位置づけを視野に入れていくことが必要なのではないか。

Ｆ 委 員：　徳島県は面積が狭いのに８つもの市がある。そのバランスや互いに提携することを考えたほうが良いのではないか。

Ｇ 委 員：　伝統芸能の人形浄瑠璃については、座は県内に十数あるが、半数は徳島市内の人が関わっている。人形浄瑠璃などの伝統芸能は、市の文化の核のひとつとなるのではないかと思う。

今、人形浄瑠璃の世界では後継者が不足し、平均年齢は７０歳近くになっている。子どもたちに人形浄瑠璃へ関心を持ってもらうために様々な場所で活動しているが、子どもたちが成長し、大学進学や就職などで上京すると地元へ戻ってこない。

半面、地域の座で育った人は地元に残る人が多い。Ｕターンで地元に戻ったとしても、座員が少人数なので、上演可能な演目が限られてしまうのが課題となっている。

伝統芸能全般に言えることであるが、若者が地元に戻ってきたときに伝統芸能へと戻れる、そのような受け皿ができたら良いと思う。

会　　長：　市民会議の運営のあり方等も含めて、他にご意見はあるか。

Ｂ 委 員：　市民会議委員以外の市民から意見を聴取する予定はあるか。

事 務 局：　現段階では予定していないが、当会議で意見がある場合には検討したい。

文化振興ビジョンの策定にあたりパブリックコメントを実施する予定はある。

Ｂ 委 員：　パブリックコメントよりも、例えば、人形浄瑠璃の座や「マチ★アソビ」関係者、商店街などのヒアリングをしないと、今回話し合った内容の解決が難しいのではないか。

事 務 局：　検討させていただく。

会　　長：　第１回徳島市文化振興ビジョン策定のための市民会議を終了する。

事 務 局：　次回は、平成２８年１月を予定している。

以上